

図書館の思い出

消化器内科・超音波診断センター 黒松 亮子

先日、久留米大学医学部の学年同窓会があった。久しぶりに会ったにもかかわらず、昨日も会っていたように会話が弾むのが同窓会の特徴であろうか。昔懐かしい顔が集り、近況や昔話に花をさかせた。私の学年は、本学に通っている、いわゆる父兄の立場の同級生が多いためか、国家試験が話題に上った。自分たちの現役合格率は90%以上だったのはどうして今は・・・とか、いや、今は覚えなければならない内容が倍増しているとか、いろいろな話でもりあがる中、当時、毎日図書館で勉強していたことを思い出した。当時はもちろん勉強会室など無かったので、図書館の3階の小部屋が勉強の場であったのだ。6人で勉強会をつくり、毎日、分担して過去問を解いた。サボりたくなるときもあったが6人の誰かが助けてくれた。勉強会がない土、日も図書館に通った。私のお気に入り奥の方の窓際の席であった。図書館はしんとした独特の緊張感があり、家で勉強するよりも、教室で勉強するよりもはかどった。研修医時代にも文献コピーのためたびたび図書館にお世話になった。本の独特のにおいがする書庫での作業はつらく、写真のコピーは不明瞭であったが、過去の資料から多くのことを学んだ。

病院本館から筑後川の方へ歩いていくと、病院の雰囲気から大学の雰囲気へと徐々にかわっていく。臨床を中心に活動している私の気持ちも、医師から研究者、大学の教育者へとかわるように思う。大学の医師はいろいろな顔をもつ。それぞれの立場で図書館には助けてもらった。

私は、図書館のあの昔から変わらない独特の静かな雰囲気が好きである。個々の目的で、勉強したり、雑誌を読んだり、目的の書物を目で見て探したり、時にはインターネットでは出会うことのないであろう内容の雑誌や本に出会うかもしれない。そして、時には、それが自分の分野の新たな発想につながる可能性もある。

最近、図書館に足を運ぶ機会がめっきり減ってしまった。インターネットの普及により本や文献が容易に手に入るようになったことが理由の一つであるのはいうまでもない。ただただ目の前の仕事をこなすことで日々が過ぎていくなかで、時には、図書館で仕事をしたり、ゆっくりと小説を読んだりする時間を持ちたいと思うのである。大学図書館の顔は以前と大きく様変わりしており、学術情報基盤としてさらに進化していく一方、私のような気持ちで利用することもあってよいと思う。